

## 現代フランスにおける「ピエ・ノワール」 ——その生成とそれが目指すものに関する一試論

足立綾\*

### The Pieds-Noirs in Contemporary France

ADACHI Aya\*

In French Algeria, where its history dates back to 1830 and ended with the Algerian independence in 1962, there lived millions of French citizens of many generations. Those French people were virtually forced out of Algeria during and shortly after the Algerian War (now generally known as *l'exode*=the exodus), and the majority of them who relocated to the French mainland were then came to be called collectively, *“pieds-noirs”* (black feet) and therefore, recognized in metropolitan France as a minority group. This name “pied-noir”, of which the true origin remains mysterious, but started to be used most likely in mid-1950's by French media, has long embraced some negative images such as “colonialists”, “partisans for the extreme right”, “racists”, “terrorists”, and so on. On the other hand, most of those *“pieds-noirs”* had never set foot on the French mainland before *l'exode*, and also having no relations to depend on and a social climate harsh to them especially at the time, needed to form some sorts of organizations that provided a platform for starting new lives. And the damages both psychological and material brought about by the war and *l'exode*, and also by negative prejudice, were thus to be treated by these organizations. At the same time, the activists that have led those organizations purposely employed the term *“pieds-noirs”* for themselves and have carried out organizational activities under that name.

Some of those *“pied-noir”* organizations have been active to this date and the number of advocates have even been increasing after more than 40 years since *l'exode*. However, the aging of the members is inevitable and thus those organizations have been facing the task of passing down their memories and the survival for the existence.

The purpose of this Paper is to examine the background and the meaning of the movement from the point of viewing this employment of the name “pieds-noirs” by former French citizens of Algeria themselves as a sign of their “counter-minoritization” (=positively becoming a minority group).

キーワード：仏領アルジェリア，植民地，マイノリティ，「逆マイノリティ化」，文化，記憶  
Keywords: French Algeria, Colonization, Minority, 'Counter-minoritization', Culture, Memory.

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻；Department of Area Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro, Tokyo 153-8902/ ayadaci@yahoo.co.jp

## はじめに

本稿は、「ピエ・ノワール *pieds-noirs*」と呼ばれる人々のそのカテゴリゼーションの創造を、名指しと名乗りの過程から論じ、その名乗りによって目指されるものに関して一視点を投げようとするものである。

一般に「ピエ・ノワール」とは、1830年から192年間仏領であったアルジェリアに定住していた仏市民を指す俗称であり、アルジェリア戦争中に仏本国のメディアが用い、その後本国社会に定着した。それは、植民地主義への批判が世論において高まるなか、「植民者」であった彼らに付与された蔑称でもあった。しかし、それはその後、仏本国移住後に仏領アルジェリア出身の仏市民のコミュニティを表す語として、彼ら自身の名乗りを伴うものとなる。

ある特定の名のもとに差別的なまなざしを向けられてきた「ピエ・ノワール」とは、仏本国社会において、多数派に対して少数派であり、同時に差別の対象である社会的弱者の集団という意味で「マイノリティ」である。そして、当事者自ら「ピエ・ノワール」と名乗ることは、その名を積極的に用いてマジョリティ社会との差異を受入るということであり、その「マイノリティ」としての位置づけを一見受入る動きであるようにも見受けられる。しかしながら、その名乗りの行為は、「ピエ・ノワール」という語の持つ性質上、その意味合いを変えていくことを可能にし、よって「逆マイノリティ化」とでもいえる動きと捉えることができる。「マイノリティ」とは、多数派に対して少数派の、差別の対象である社会的弱者の集団であると述べたが、「逆マイノリティ化」あるいは「積極的なマイノリティ化」という語に関しては、そのような「マイノリティ」としての位置づけを否定する代わりに、つまりマジョリティ社会における「ピエ・ノワール」という名を否定する代わりに、そのような名指しを逆にとりその名を積極的に用いて差異化を為そうとする動き、そして差別や抑圧と結びつく「マイノリティ」という語に対しその逆を目指そうとする動きが見られることからそのプロセスを指して用いている<sup>1)</sup>。

本稿では、「ピエ・ノワール」という語についても考察した上で、この「逆マイノリティ化」への過程とそれが目指すものを明らかにすることを目的とする。

本稿は、筆者が2002年8月および2004年11月における個人的な短期現地調査、そして東

---

1) この「逆マイノリティ化」という用語は、「ピエ・ノワール」の例に限らず、ある社会において「マイノリティ」とされ、様々な意味で差別の対象である集団に属するとされる人々が、その立場つまり自身がマジョリティ社会の成員とは異なるという見方を自ら受入れながら、その名誉回復を目指そうとする動き一般に適用できると考える。それは、特に「名」のような境界によってその範疇化がなされるという「エスニシティ」生成の議論を踏まえたものであるが、「エスニシティ」という語が、現在でも一般には、ある原初的絆を共有する「民族」という意味で使われることも多いことにも配慮し、本稿では「エスニシティ」という語は使用しないこととした。

京大学 DESK (German and European Studies in Komaba) の助成金を受け実現した 2004 年 2 月の現地調査、および東京大学学術研究活動等奨励事業の助成を受け実現した 2007 年 8 月の現地調査、そして、2004 年より随時行ってきた日本でのインタビュー資料をもとに執筆されている。またそれに加え「ピエ・ノワール」および仏領アルジェリアと仏植民地の歴史に関する文献資料・先行研究を参考にした。また、本稿の一部に、筆者による修士論文『セルクル・アルジェリアニストの活動にみる「ピエ・ノワール」の記憶とアイデンティティ』からの抜粋を含むものである。フランスでの現地調査においては主に、現在その会員数や活動の活発さという意味で、数ある「ピエ・ノワール」組織の中で最大であるとされる文化組織「セルクル・アルジェリアニスト Cercle Algérieniste<sup>2)</sup>」についての調査を進め、そのメンバーとの接触とインタビュー、年次大会などのイベントへの参加、資料収集などを行ってきた。また日本でのインタビューは、日本在住の「ピエ・ノワール」の協力により実現した。しかしながら、これらの短期調査で得られた資料は未だ十分とはいええず、また筆者の力不足のために、本稿は多くの課題を残すものであり、「ピエ・ノワール」問題についての初歩的な試論であることを断っておきたい。

なお、「ピエ・ノワール」に関する研究は仏国内でも多いとはいええず、無論日本においては、未だ未開発のものである。このように研究の蓄積が未だ多くない理由として、仏植民地主義、特にアルジェリアの過去やアルジェリア独立戦争に関わることへの言及が長い間フランスにおいてタブーとされ、1992 年以前は、史資料が公開されていなかったことがある。しかし、1999 年に、それまで国内問題として「事変 événement」とされ、実態を隠すような表現をされていたアルジェリア戦争を正式に「戦争」という表現に変える法律が制定され、2002 年に仏国内のメディアで、アルジェリア戦争中に仏軍によって行われた虐待や拷問が取り上げられるようになり、引揚者団体がそのような報道に反対したことで、植民地の過去に関する意見そして「記憶」の対立が表面化するようになった。そのような状況下で近年「ピエ・ノワール」たちの活動にも関心が集まっている。

「ピエ・ノワール」に関する研究書も、そのような流れの中で、1980 年代後半から 90 年代に入って出版されはじめた。代表的なものに、「ピエ・ノワール」の記憶を主題に 1830 年にさかのぼり記したユロー [Hureau 1987]、彼らの「引揚げ」の過程と仏本国への再定住の過程、また彼らのアイデンティティ生成について記したジョルディ [Jordi 1993, 1995, 2002]、そして同じく、多くのインタビュー資料から仏領アルジェリアの仏市民の視点からその過去を記したヴェルデ＝ルルー [Verdès-Leroux 2001]、また「ピエ・ノワール」を創られた共同体として論じたサヴァルズ [Savarese 2002] の研究<sup>3)</sup> が挙げられる。本稿においてはこれらの先行

---

2) セルクル (Cercle) とは英語の Circle と同様、「集まり、サークル、クラブ」の意。

研究を参照しながら、特に、「ピエ・ノワール」意識、そして「ピエ・ノワール」アイデンティティの生成に関して「名乗り」という視点からより焦点をあて、それらを継承しようとする組織的な動きに着目して論じる。

また「ピエ・ノワール」とは、一般に仏領アルジェリア出身の欧州系及びユダヤ系仏市民のことを指す用語である<sup>4)</sup>が、本稿においては、「ピエ・ノワール」というアイデンティティ自体についても問題とするため、「ピエ・ノワール」という語が仏領アルジェリア出身の（欧州系・ユダヤ系）仏市民を指すことを前提として用いられない文脈においては、「仏領アルジェリア出身の仏市民」あるいは「アルジェリア出身の仏市民」とし、また、独立以前の彼らについては、「アルジェリアの仏市民」と記述することを断っておきたい。

## I 「ピエ・ノワール」誕生までの歴史的背景<sup>5)</sup>

アルジェリア出身の仏市民たちの存在は、アルジェリアにおける仏統治の歴史の所産である。本章では、なぜアルジェリアの地に多くの仏市民が存在するようになったか、そしてどのように彼らが仏本国に移住することになったかということについてまずは歴史的な流れを概観する。

### 1 フランスのアルジェリア統治と入植者

フランスによるアルジェリア統治の歴史は、1830年に当時オスマン＝トルコの一部であった北アフリカの地にフランスが軍を派遣したことに遡る。フランスは、後の主要な都市になる沿岸部分を制圧し、その後少しずつ内陸部へと領地を広げ現在のアルジェリアの境界を制定した。仏政府はその5年後の1835年に北アフリカ仏領総督府を設置し、さらにその10年後の1845年、アルジェリアは、総督が帰属していた戦争省の独占的な権限の下に置かれると同時にアルジェ（Alger）、オラン（Oran）、コンスタンチヌ（Constantine）という、軍政地域と民政地域を合わせもつ三つの地方に分割された。その後、1848年憲法において、アルジェリアは仏領土の不可分な一部であること、本国の法体制の下に置かれることが宣言された。さらに1848年、三地方の民政地域は、それぞれ県（département）となり、その内部でさらに郡、市町村に下位区分される。

3) サヴァルズはまた、昨年出版の著書においてアルジェリアの過去に関する記憶の対立をテーマとし、「ピエ・ノワール」の記憶についても扱っている [Savarese 2007]。

4) ユダヤ系の人々に関しては、アルジェリア出身のユダヤ人（Juif d'Algérie）あるいはユダヤ系ピエ・ノワール（Juif pieds-noirs）とすることもある。

5) 歴史的背景についての記述は、以下の文献を参照した [Ageron 1973; Benamou 2003; Delpard 2002, 2003; Pervillé 2003; Robles 1982; Stora 2001; Tillion 1958; アジュロン 2002; 平野 2002; ホーン 1994; ヤコノ 1998]。

このような行政処置にみられるように、アルジェリアは、他の仏領とは異なり、仏本国内務省下に置かれた特別な植民地であった。このフランス化推進の背景には、アルジェリアを、単なる植民地とは異なる「フランスの一部」にしようとする政府の意志が働いていた。そして、その目的のためには入植者の存在が不可欠とされたのである。

アルジェリアの地には、フランスによる統治以前にも、少数の欧州系の商人が既に定住していたが、仏政府は、開発を推進しようとアルジェリアへの仏本国からの人々の移住を奨励し、宣伝活動などを行った。しかし、当時の仏本国において出生率の低下がみられたこともあり、また、移住しても北アフリカの厳しい気候とそれに伴う開拓や居住状況の厳しさなどによって本国に帰国してしまう人々も多かったため、仏本国からの移民は政府の思惑通りには進まなかった。そこで、奨励されたのが、周辺のヨーロッパ諸国からの移民である。これはある程度成功し、アルジェリアの地には、北アフリカに程近く、気候等の環境も似る南ヨーロッパの国々、特にスペイン・イタリア・マルタ島などから、多くの人々が移住した。しかし、外国人人口の割合が高くなったことで仏政府は同化政策に踏み切る。彼ら外国人の主導でアルジェリアがフランスから分離することを怖れた当時の仏政府は、1889年に仏本国で国籍法が改正された際、現地人を除いてアルジェリアで生れた外国人の子供にも、自動的に仏市民権を与えることとしたのである。加えて、アルジェリアの地には、紀元前からユダヤ人が定住し、他にもエジプト人支配から逃れたパレスチナからの移住ユダヤ人、また16世紀にスペインから移住したユダヤ人、イタリア出身のユダヤ人なども定住していたが、国籍法改正に先立つ1870年に、民政移管を決めたクレミュー法<sup>6)</sup>によって、彼ら3万人強のユダヤ人たちにも仏市民権が付与された。このような外国人と現地ユダヤ人の同化政策の結果、1891年には仏市民の数が外国人人口よりも約10万人ほどの差をつけて上回るようになり、1926年には、約50万人ほどの差をつけて仏市民の数が外国人人口を大きく上回ることになった [Kateb 2001: 187]。とはいっても、根っからのフランス人 (“Français de souche”) が全くいなかったわけではない。1871年の普仏戦争でのフランス敗北によって、ドイツに割譲されたアルザス＝ロレーヌ地方在住のフランス人が、「フランス人でありつづけるために」アルジェリアに移住したという話はよく知られており<sup>7)</sup>、また南仏からも、比較的多くの移住者があった。しかし、実際にアルジェリアに留まった仏本国出身者はやはり比較的少数に留まる。従って、現在、アルジェリア出身の仏市民とされる人々の先祖の大半が、本国に根を持たず、アルジェリアの地において仏市民と

6) Le Décret Crémieux. 1870年、司法庁大臣でアルジェリア事情を任されていたクレミューは、9つの政令を国会に提出。それらは3県の設立、アルジェリアを県と軍の地域に分けること、民事制度の制定、総督への行政機能の中央集権化、犯罪に関する司法の改革、外国人と回教徒の帰化の条件と、イスラエル系の人々の集会的帰化についてであった。クレミュー法はヴィシー政権時代に一旦廃止されるが1943年に復活する。

なった。そして、その後約1世紀に亙りアルジェリアの地には、彼らの子孫が三ないし四世代に亙って存在することとなったのである。彼らは、ワイン栽培などの農業、インフラ整備や町々の建設など開発に直接従事し、都市の発展以後は、植民者といってもその多くが都市住民となった。そして1962年の時点では、約100万人がこの地で仏市民として生活していたのである。

彼らの「フランス人」としての意識、そしてフランスという国への忠誠心は、本国住民よりも一般に高かったといわれる。しかし同時に、本国との実際のつながりをもつ人々は少なく、1962年前後に本国に渡るまで、本国の地に足を踏み入れた経験さえもたない人が多く存在した。本国では、経済開発や世界大戦における植民地からの出兵、植民地所有の是非、またはそこでの生活などが新聞などメディアで取り上げられていたこともあり、植民地自体への興味・関心の程度は低かったという従来の見方は、必ずしも正しくない。しかし、当時アルジェリアを含むマグレブを舞台にした映画の多くの主題が恋愛や冒険ものであったことから、やはり、多くの一般本国人にとって、アルジェリアは当然のフランスの延長でありながらエキゾチックな場所ではなかったというのもまた現実的な見解であるだろう。いずれにせよアルジェリアが当然のフランスの延長であったと同じく、アルジェリアにおける仏市民の存在は当然のものであり、独立戦争以前はそれほど注目されることはなかった。これは裏を返せば、同じ「フランス人」といっても、仏本国住民一般にとっての「アルジェリアの仏市民」との連帯意識は低く、このことは、独立戦争の終結に関する世論調査に如実に現れることになる。

## 2 アルジェリア独立戦争と「エグゾード」

アルジェリア独立戦争<sup>8)</sup>は、1954年、現地イスラム教徒たちによる民族解放戦線FLN (Front Libération Nationale) の先導によるコンスタンチヌ、オラン地方での現地人暴動に始まった。その後1955年には、FLNの下部軍事組織であるALN (Armée de Libération Nationale) に組織された農民の暴動が起きるが、これに仏軍が介入し、アルジェリアは実質的に八年間に亙る戦争状態に陥ることになる。この間、アルジェリアの仏市民たちの大半がアルジェリア独立に反対し、集会・デモ運動などを行っていた。1958年にアルジェにおいて、集まった仏市民たちを前に仏領アルジェリアを賞賛する発言<sup>9)</sup>をしたシャルル＝ド・ゴールは、

7) アルザス＝ロレーヌからの移住者の存在は、しばしば、アルジェリア出身の仏市民により強調される。しかし、それが強調されるのは、実際にその数が多かったという理由からではなく、現在では「植民地」という枠組みで語られることが多いアルジェリアは、仏本国の一部であったがドイツに割譲されたアルザス＝ロレーヌよりも、「フランスの一部」だと考えられていたのだ、ということを確認したいという心情からだとしてらえてよいだろう。

8) 1999年に正式に「戦争」と認定される。アルジェリアはフランスの内務省下にあったため、それ以前は国内の「事変 évènement」とされていた。

彼らの大きな期待を集める。しかし、ド・ゴールは、同年12月に大統領に就任すると、対アルジェリア政策を「アルジェリアのフランスへの統合」から「フランスとの連合関係におけるアルジェリア自治」へと、そして最終的には「アルジェリア独立」へと次第に変化させ、1962年には、FLNと和平協定締結に踏み切った。これはエヴィアン協定（Les Accords d'Évian）と呼ばれるが、この協定の締結によって停戦が決定し、アルジェリア情勢への仏軍の介入も停止する。このようなド・ゴールの政策の変化と決定は、現地仏市民たちの失望と怒りを買ひ、それは後にド・ゴール暗殺未遂事件をも引き起こすことになる。

ド・ゴールのこの政策の変化は、植民地統治に対する国際的な批判を踏まえたものでもあったが、それはまた本国世論の意志も反映していた。アルジェリアでの暴動が起きた当初、仏本国社会の世論では「フランスのアルジェリア」が圧倒的に支持されていたが、その後の情勢が悪化していくにしたがって、アルジェリアは独立すべきだとの声が強くなる。エヴィアン協定の締結に先立ち、1961年に国民投票が実施されたが、本国の70%以上の投票者がアルジェリア独立を支持している。これには、経済界からの「植民地は益がない」という声に加えて、J=P サルトルやF・ファノンなどの知識人に代表された反植民地主義言論活動の影響もまた大きかった<sup>10)</sup>。そして、本国社会の世論は、独立戦争が凄惨を極める中、終止符を打つべきだという方向に向かったのである。この独立戦争は、実際、非戦闘員や子供まで巻き込んだ「汚い戦争」であった。しかし、そのような世論の背景には、本国人とアルジェリアの仏市民との間の連帯意識の薄さがあったともいわれる。ヴェルデールルーによれば、1961年には仏本国人の多数が、アルジェリアの仏市民は独立後のアルジェリアに留まることはできないだろうと考えていたのにも拘らず、69%がその賠償に貢献することを拒み、そして1962年には、アルジェリアの仏市民に対し「連帯意識をもつ」と答えた仏本国人は29%であり、53%が「連帯意識をまったく持たない」と答え、さらに、アルジェリアの仏市民たちの反対にも拘らず、アルジェリア独立を承認したエヴィアン協定に満足していると答えた仏市民は82%に上った [Verdès-Leroux 2001: 16-21]。この背景には、植民地への関心の程度の低さということのみならず、個人レベルにおいてアルジェリアの仏市民たちとの親類関係などの実際のつながりがなかったことや、戦争を機に、植民地主義への批判の高まりが「植民者たち」へ向けられたことも理由として挙げられる。こうしてアルジェリアの仏市民は、差別的な植民地制度によって築

9) “Vive l'Algérie française” (仏領アルジェリア万歳)。ドゴールはまた「私はあなたたちを理解しています (“Je vous ai compris!”)」と発言し、現地軍とアルジェリアの仏市民たちを安心させ支持を集めたという話はよく知られている。しかしド・ゴールが誰を指して「あなたたち」と言ったのか本当のところははっきりしていない。

10) サルトルは、植民地主義は一つの体制であるとし、植民地アルジェリアの問題は、経済上の問題、社会的問題、心理的問題ではなく、フランスがアルジェリアを植民地としていること自体が解消されなければ解決されえない問題、だとした [サルトル: 2002]。

いた富への執着からアルジェリアの独立を拒み、独立戦争を泥沼化に追い込んだ張本人といった視線を浴びていくことになった。

フランスとFLNとの停戦を宣言したエヴィアン協定締結後には、アルジェリアにおけるFLNのテロ活動に対する仏軍の派遣は停止されるが、その後もテロは継続する。そして、デモ活動を行っていたアルジェリアの仏市民たちへの攻撃や誘拐や虐殺は停戦後も続き、仏軍の協力を得られなくなったアルジェリアの仏市民たちが軍部の独立反対派とともに組織した秘密軍事組織 OAS (Organisation Armée Secrète) の報復活動によって、アルジェリアでは事実上の戦争状態が続いた<sup>11)</sup>。協定締結後もアルジェリア独立反対の主張を掲げてデモ活動などに従事するアルジェリアの仏市民の存在はしかし、アルジェリアの民族自決に支持が集まる本国社会において同情を得るどころか批判と嘲笑の対象となっていく。そして、アルジェリアの状態が悪化するなか、多くの仏市民が事実上アルジェリアからの撤退を余儀なくされることになる。彼らは、「鞆か棺か (“La valise ou cercueil”）」という切迫した状況の中、急いでアルジェリアを後にするが、「鞆」は2つまでしか許されず、家屋などを含む財産全般を失った人が殆どであった。統計によれば、1954年から1964年の10年間に、約100万人の仏市民がアルジェリアから本国へと移住したが、1961年12月に海外フランス人の受入と定住に関する法が議決されると、1962年に移住者の数はピークを迎える。これがエグゾード (exode) と呼ばれる集団移住である。1961年法議決時に予想されたアルジェリアからの移住者の数は40万人程であったが、実際はその倍以上の人々が本国に押し寄せた。その社会的インパクトは大きく、このこともまた、本国でアルジェリア出身の仏市民たちが「集団」として認識される理由となったのである。

仏本国で、アルジェリアの民族自決への賛成意見が高まり、植民地主義に対する批判が高まっていた時期に、アルジェリアの独立に反対し、アルジェリアがフランスの一部として存続することを主張しつづけた多くのアルジェリアの仏市民や OAS によるテロ活動を取りあげた報道は、アルジェリアの仏市民たちを、植民地主義者・テロリストなど否定的なイメージを持つ集団として浮かび上がらせた。そしてアルジェリア戦争とその後に続くエグゾードにより仏本国社会で可視化した約100万人アルジェリアの仏市民は集合的に「ピエ・ノワール (黒い足・足黒)」と呼ばれるようになるのである。

11) 停戦後もアルジェリアの仏市民たちやアルキ (仏側について鎮圧に加わった現地人補充兵 注16参照) への攻撃が続いたことは、アルジェリアの仏市民たちが自身らの「記憶」として語りついでいることの一つであるが、現在でも仏政府により正式に認知されていない。

## II 「ピエ・ノワール」という名指しと名乗り

### 1 「名指し」とその名の侮蔑的イメージ

「ピエ・ノワール」という語は、アルジェリア独立戦争末期に「フランスのアルジェリア」を支持する現地仏市民たちを指して仏本国のメディアによって使用され、報道から本国社会に広まったとされている。それは、仏本国において「アルジェリア出身の仏市民である」という特別なカテゴリーをあらわすものとなり、独特の話し方や地中海的な容貌や生活習慣など、本国人との「質的な」違いを象徴する語となった。またそれは公の場で使用されることはなくとも、嘲笑や軽蔑的なまなざしを伴って「ひそひそ話」の類で用いられる蔑称として使われてきた。ヴェルデ＝ルルーは、アルジェリア出身の仏市民にとって本国社会は「邪険な母親」であったと表現し、170人を超える聞き取り調査において、「(仏本国社会)で、好意的に受入れられた」と答えたアルジェリア出身の仏市民の例を「非常に稀な例外」として自身の著書で紹介している [Verdès-Leroux 2001: 381-382]。

「ピエ・ノワール」の侮蔑的イメージとは、現地人をこき使い、富を築いた「強欲な植民者」であり、その植民者としての地位を保持するために、アルジェリア独立反対のテロ行為に従事した「テロリスト」あるいはその行為を支持した人々、そして「アラブ人」を差別し極右を支持する人々だといったものである。このようなイメージは、アルジェリア戦争が凄惨を極める中、フランス世論が、圧倒的な「フランスのアルジェリア支持」から反植民地主義とアルジェリア独立支持へと傾いていったことと無関係ではない。アルジェリア戦争は、アルジェリアの仏市民たちの存在をフランス本国の世論に意識させることになるが、同時に彼らに対する多くの批判も生み出した<sup>12)</sup>。サヴァルズは、アルジェリア戦争中に形成された、ピエ・ノワールと植民者を無意識に同一視する傾向がエグゾードの時期に強化され、そして本国人たちはたやすくアルジェリアの仏市民たちのことを植民地主義者として一枚岩に捉えたとし、その上、多くの文筆家たちが、[アルジェリアの仏市民たちを] 集散的に「現地人たちをこき使う」搾取者だとフランス本国人読者に示したのだとする [Savarese 2002: 75-76. [ ] 内筆者]。また、自身アルジェリア生れであったノーベル賞作家のアルベール・カミュも「いくつかの報道によれば、アルジェリアは鞭と葉巻を手にキャディラックにのっている人々であふれているようだ」と表現したという [Verdès-Leroux 2001: 23]。

12) 世論に影響を与えたものには、アルジェリア戦争に参加したフランス本国からの徴集兵が本国帰還後に、戦争の証人としてその様子を新聞や書物などに記したのもあった。1958年に日本においても『太陽の影 アルジェリア出征兵士の手記』[ミュレール他：1958]という1冊の書物として翻訳された2つの証言集、『ジャン・ミュレールの記録』と『フランス召集兵の証言』は、アルジェリア戦争中のフランス軍による拷問の証言を多く含むものであるが、そこには〈アルジェリアのフランス人〉に関する否定的な記述もまたみとめられ、ピエ・ノワール(足黒)という言葉も使われている。

フランスが、8年間に亙る戦争にもつれこむほどアルジェリアに固執した理由には確かに100万人を超すアルジェリアの仏市民の存在があった。アルジェリアの仏市民たちの殆どは現地生れであり、母国としての「フランスのアルジェリア」に固執したが、他方フランスにとってもアルジェリアが独立することで彼らが本国に流入することは大きな問題であった。彼らの存在は確かに、結果的にアルジェリア戦争を悪化させた大きな要因の一つでもあったのである。長引く戦争に嫌気を示しはじめた本国社会の世論は、経済的・人道的な理由から現地仏市民に反感を募らせた。「ピエ・ノワール」という名指しは、長い間本国社会で意識されず本国人との連帯感情も少なかった約100万のアルジェリアの仏市民たちの集団移住（エグゾード）に伴う、そして特別な植民地であったアルジェリアの凄惨な戦争を経た独立に伴う否定的な感情が絡んだ、本国社会の反応だったといえるだろう。

アルジェリアの仏市民たちは、仏本国生れではなくその先祖も仏本国出身ではない人々がその殆どであったと既に述べたが、彼らは本国社会において、つまり本国人にとっては、仏市民といえども新参者であり「異者」であった。そしてそれ以上に、彼らは植民地主義というフランスにとっての「負」の遺産を体現する人々であり、独立したアルジェリアとの新しい関係構築に動き出したフランスにとって忘却されるべき「フランスのアルジェリア」を支持する厄介者であったのである。いずれにせよ、アルジェリア出身の仏市民を指して用いられてきた「ピエ・ノワール」という語は、アルジェリア戦争以来極右的なイメージを持つ言葉として否定的に認識されてきた「フランスのアルジェリア L'Algérie française」という語同様、植民地主義やアルジェリア戦争の過去への否定的な国民感情と切り離せない。

アルジェリアというある意味では隔離された場所においてではあったが、本国人と権利上は変わりのない「仏市民」としてアルジェリアの各都市に定住し生活していた100万の仏市民たちは、仏本国移住後、本国社会において、そしてそのような仏本国人のまなざしにおいて、「マイノリティ」となったのである。しかし、アルジェリア出身の仏市民たちにとってその語は「本国移住後に初めて遭遇したもの」であった。つまり、その名も、カテゴリゼーションも、否定的なまなざしのもとにおける「マイノリティ」としての位置づけも、本国移住後初めてアルジェリア出身の仏市民たちに認識されたものだったのである。

## 2 名乗りの背景——帰属意識の喪失と「コミュニティ」への希求

アルジェリアの仏市民たちは、仏本国社会においてある一つの「集団」として認知され、「ピエ・ノワール」と呼ばれることになったのであるが、アルジェリアの仏市民たちがアルジェリア時代に一つの「コミュニティ」を成していたわけではなかった。その多くがアルジェリアの主要三都市に散らばって生活し、その数は総勢100万人を超えていたという点からも、彼らがある一つのまとまった「集団」であったと考えるのは現実的ではない。アルジェリアに

において「現地人法」という特別な法のもとに仏臣民ではあったが市民権をもたなかった多くのアラブ・ベルベル系の人々に対して、彼らは本国フランス人と同じく市民権を保持する仏市民であり、同時に先祖の出自や宗教も異なるいわば「寄せ集め」の人々であったのである。日本在住のピエ・ノワールであるB氏はアルジェリアでの生活について次のように語っている。

わたしたちは、それぞれ別々に暮らしていました。スペイン系、イタリア系、ユダヤ系・・・隣り合って暮らしていたのです。ちょうどアメリカ合衆国の西海岸のようにね。何も問題はなかったのです。

とはいっても、仏領アルジェリアでは、本国人对し「フランカウイ」という語が使用されるなど、本国社会や本国人ととの一定の精神的距離があった。そして「フランカウイ」に対して彼らが自分たちを指して用いたのは「アルジェリアン＝アルジェリア人」というアイデンティティであった<sup>13)</sup>。この「アルジェリアン」というアイデンティティは、無論、現在、アルジェリア国民を指す語であるが、その語の含まれる「アルジェリア」の国境は前述のようにフランスが定めたものであり、アルジェリアはフランスの県を有するフランスの一部として考えられていた。そのため、当時「アルジェリアン」とは、フランスの一地方としてのアルジェリアの住民を指すと言う事ができたのである。

この語は、現地生れの仏市民たちが、移民の数を上回るようになった1920年代に提唱されるようになり、文芸運動「アルジェリアニズム」という形にもなっても現れる。この運動は、「パタウェット」（1900年頃から欧州系の人々の間に生れ始めていた、フランス語を基礎に、スペイン語、イタリア語、アラビア語や、マルタ、マホンなどの方言などの語彙が加えられ混じり合った大衆言語）で書かれた書の出版に始まり、普仏戦争で敗北した「弱い」本国に比べ生き活きとした力強い社会としてのアルジェリアにおいて「寄せ集め」の人々が織り成す日常を一つの「文化」として描き出していこうとする文芸運動であった。このような運動は、様々なルーツを持つ現地生れの仏市民たちの間における、「仏領アルジェリア」という共通の基盤への帰属意識を多少なりとも示唆していたと考えてよいだろう。

しかし、アルジェリアという土地への集合的な帰属意識、少なくともアルジェリアニズムで提唱されたそれは、あくまでもフランスの一地方人の「アルジェリアン」としてのものであっ

13) バロリは、「アルジェリア人だと自称し、ある時代には外部からもそう呼ばれていた人々」に集合的に共通する特徴を、「彼らが非常に誇りに思い、決して手放したくないと思っている特別な条件・状況下に身をおくフランス人である、という意志によって生かされていること」だとしている。またバロリは、彼らの気質を、人とその言語、地中海的カトリシズム等から紹介している。彼に拠れば、フランス領アルジェリアにおける特に欧州系第二世代は、出身国の影響が少なく、共通の習慣や特徴が現れるのを妨げなかった、という [Baroli 1967: 211-261]。

た。アルジェリアニズム運動には、欧州系の仏市民だけでなく、現地人との共生をも視野にいれようとする動きも見られたが、最終的にフランス本国との決別を目指す類いのものに発展したわけではない。その背景には、やはり数の上で多数派であれども市民権を持たずその権利を制限されていた「現地人」に比べ、仏領アルジェリアにおける仏市民たちの存在は少数派であれども特権的な地位にあったこと、そしてそれはアルジェリアが「仏領」であればこそであったということがある。つまり、欧州系の仏市民を指した「アルジェリアン」とは、「アルザス人が仏市民であるように」アルジェリアがフランスの一部であるという文脈においてのみであった。「フランス」は、彼ら仏市民にとって実際的に不可欠な存在であり、このことは、本国人との連帯意識は薄くとも「フランス」という国への忠誠心や愛着が一般に仏本国社会におけるそれより強かったと言われる理由でもあろう。しかし、アルジェリアが独立したことで、仏領アルジェリアという文脈は失われ、「アルジェリアン」とは、独立後の「アルジェリア人」を指す語となるのである。

アルジェリアの独立と仏本国への移住は、アルジェリアの仏市民の多くにとって「故郷」の喪失であったのみならず、同時に帰属意識の基盤を失うことでもあった。彼らにとっての「アルジェリア」とは「フランスのアルジェリア」であったために、それは物理的な離郷以上のもの、精神的な基盤の喪失であったのである。ボアサンはその2002年の著書において、アルジェリア独立によって仏本国に移住したアルジェリアの仏市民たちが、「単なるフランス人でもなく、完全なアルジェリア人でもなくなり、どこにも自分たちの居場所がないという感情を抱いていた」ことを指摘し、いくつかの証言を記載している。

アルジェリアで生れたフランス人は1962年後に突然アルジェリア人ではなくなりました。そして〔アルジェリアにおいて〕招かれざる客になったのです。〔そしてフランスでも〕やはり招かれざる客だったのです。〈レネ〉

問題は、時々アルジェリアに帰ることができたとします。例えば祖父母がそこにいたとします。人はその地にひたるでしょう。コルシカ人が、ブルトン人が、自分のルーツを〔そこに〕再び見出すように。でも私たちは再び〔そこに〕飛び込むことができません、なぜなら私たちは〔そのための〕地理的な空間を持たないからです。〈ジャン＝ミッシェル〉

それは、私たちの生への二重のアプローチです。私たちを特徴づける二重性です。いや、でも、アルジェリアは私の祖国ではありません、それは私の生れた地です。それは私のルーツ、私の先祖のルーツがある国です。それは私の先祖が眠るところ

〈オリヴィエ〉 [BAUSSANT 2002: 411-412] (〈〉 [ ] 内著者, [ ] 内筆者)。

このようなデラシネ意識が、仏本国移住後の彼らがなんらかのコミュニティを希求した理由の一つであった、そしてそれが「ピエ・ノワール」という名乗りの前段階としてあったというのが筆者の見解である。そして「ピエ・ノワール」という語は、帰属意識の行き着くところの象徴として捉えられていく。それはある「ピエ・ノワール」の次のような発言にも現れているだろう。

それは私の原点 (origine) です。私はそこで生まれたのです。この文化が私を定義するもの、さもなければ、私は何者でもありません [San Juan 2004: 6] (強調は筆者)。

### 3 「ピエ・ノワール」という名乗り

「ピエ・ノワール」という呼称が、仏本国に移住したアルジェリア出身の仏市民たちに付与された蔑称であったことには既に触れた。蔑称でありながらしかしこの呼称はその後アルジェリア出身の仏市民の間で、自身を指す呼称として使用され始める。1970年代には、仏領アルジェリア出身の仏市民による諸組織が多く誕生したが、それらの諸組織が発行する機関誌やパンフレットにも登場するこの語は、「〈ピエ・ノワール〉自身達によって最も頻繁に使用される」ようになった。

なぜ蔑称であった「ピエ・ノワール」を彼ら自身が用いるようになったのであろうか。この問いに、「セルクル・アルジェリアニスト」広報担当の一人であるN氏は、それは「挑戦」なのだと答えた。

(ピエ・ノワールという語はフランスのメディアが《アルジェリアのフランス人》たちを指す言葉として) 一嘲笑的なニュアンスで一使い始めたものです。しかし最終的に、ある挑戦として、〈アルジェリアの仏市民〉たち自身が自らを呼ぶ言葉として用いました。私たちはピエ・ノワールであることに誇りをもっているのです。

「ピエ・ノワール」という語が植民地主義やアルジェリア戦争の過去に対する否定的な国民感情と深く結びついた語だということは既に述べたが、そう考えれば、その語への「挑戦」とはそのような過去への否定的見解に対する挑戦ということになる。そしてこのことは、「ピエ・ノワール」という名のもとに彼らの「記憶」が語られてきたことに現れているだろう<sup>14)</sup>。これは、仏政府がアルジェリアの植民地統治そしてアルジェリア戦争の過去を「忘却」しようとし、限られた情報しか公開してこなかったことに対して、そしてそれが国民の無知と無理解に

つながったとして、自らの過去を語ろうという動きである。

仏政府がアルジェリアの過去を忘却しようとしてきたことは、アルジェリアの仏市民たちが公的には「引揚者 rapatrié」とされてきたことにも現れている。この「引揚者」というカテゴリーは、海外在住のフランス人の受入と再定住に関する1961年12月26日法に定められた行政分類のひとつであり、アルジェリア出身の仏市民に対してもその名の下に様々な補償が為されてきた。この法律は、アルジェリア独立戦争の激化と共に既にはじまっていた現地「仏市民」たちの「引揚げ」と、その後に予想されるアルジェリアの独立と「仏市民」たちの集団的な「引揚げ」が踏まえられたものであり、その意味では、「引揚者」とは特にアルジェリア出身の仏市民たちを主な対象にしたものだといえよう。しかし、上記の1961年法は、「引揚者」の定義として「以前より仏主権下にあった仏領、保護領を、政治的事変によって退く、または退くことを計画するフランス人」としている。つまりそれはアルジェリア出身の仏市民だけを明確に対象として定義するものではなく、他の仏海外領、保護領の仏市民全般を対象とするものである。また、政府によって刊行された『引揚者便覧<sup>15)</sup>』を見ても、アルジェリア、チュニジア、モロッコに分かれた説明が載せられ、「アルジェリア現地人補充兵（アルキ Les Harkis）のための措置」という項目もある<sup>16)</sup>など、「引揚者」という言葉が、「仏領アルジェリア出身の」「仏市民」だけを指すわけではないことがわかる。

このような「引揚者」のうちに自らが含まれるということに対して、仏領アルジェリア出身の仏市民の中には違和感を持つ人々も多く、そのためこの語は「」付きで使われることが非常に多い。「セルクル・アルジェリアニスト」の創立者の一人であるM・カルマンは「引揚者」という語を「何があっても拒否されなければならない」としているが、その理由としてそれが個性をもたずテクノクラティック過ぎる語であること、フランスの一地方者としてのアイデンティティを曖昧にすることを挙げている。

県を有するフランスの一地方と考えられていたアルジェリア出身者と、その成立上独立が視野に入っていた保護領の出身者とでは「引揚る」という語に対する心情が異なるのは確かだろ

14) 例えば、カルマンとラコスト・アドロヴェールの共著 [Calmein et Lacoste-Adrover: 2002] は、ピエ・ノワールの若い世代を対象に、仏領アルジェリアの過去について20の質問に対して答えるという形式で、「フランスのアルジェリア」やピエ・ノワールについての「誤解」に対する彼らの見解を著している。

15) 「Le Guide Pratique de Rapatriés」

16) 「アルキ」とは、アルジェリア独立戦争中に仏側について戦った元現地兵を主に指す呼称。「Français musulman rapatriés」とも称される。彼らを巡る問題は「ピエ・ノワール」問題、あるいは同じマグレブ系の移民の問題とは別に詳しく論じる必要があるテーマである。故に本稿では、「アルキ」と呼ばれた者たちの多くが、戦争後の独立アルジェリアにおいて、勝利した民族解放戦線 (FLN) によって虐殺され、仏本国になんとか逃れた人々も、「ゲッター」に住まうことを余儀なくされ、仏社会において完全に忘却されたということ、そしてその第二世代・第三世代の運動により、現在までに仏政府との補償問題の交渉が続けられているということを特に記すにとどめる。

う。保護領であったモロッコ出身のS氏は次のように述べている。

モロッコやチュニジアで生れた仏市民たちもアルジェリア出身の仏市民たちと〔仏本国で生れたわけではないという意味では〕同じです，でも我々はモロッコやチュニジアがいつか独立して，そこから出て行かなければならないことを心のどこかでわかっていたのです，アルジェリアの場合は違いました。そういう意識があったかなかったかは大きな違いです（〔〕内筆者）。

仏領アルジェリア出身の仏市民にとって，アルジェリアは一時的に滞在している「他人の国」ではなく，祖国フランスの一部であった。その意味で，「祖国」を表す *patrie* と「再び」を表す *re-* によって構成され「再び祖国に帰った人々」を意味する「引揚者 *rapatriés*」という語をアルジェリア出身の仏市民に適用することは，フランスがその本国の一部としてアルジェリアを位置づけ，それゆえの現地仏市民の存在であったという経緯，そしてアルジェリアの独立につながった暴動を当初「事変」として鎮圧するはずであったが，最終的に独立を認めざる得なくなったという経緯を曖昧にし，彼ら現地仏市民がフランスのアルジェリア統治失敗の犠牲になったということを故意に忘却しようとした結果とも言えるだろう。このことについて，日本在住のB氏は以下のように語っている。

〔その語は〕〈祖国に帰ること〉を意味します。その多くがフランスに根をもたないピエ・ノワールたちにとっては，それは強制的な追放でした。ですから〔その呼称は〕，フランスの政府とメディアが故意に採用した，間違っただけでした（〔〕内は筆者）

また，「引揚者」という語は，「引揚げ」という文脈に限られて使用されるものでもあり，同じアルジェリア出身であってもエグゾードを体験していない人を原則として含まない。B氏は，自身を「ピエ・ノワール」だが「引揚者」ではないとし，以下のように述べた。

私は引揚者ではありません。このカテゴリーには一般に，1962年にフランスに急遽戻った人々が入ります。それは私には当てはまりません。私の両親は独立後のアルジェリアに10年間とどまりました。私自身はフランス〔本国〕で学生だったのですが，両親が最終的にアルジェリアをでるまで定期的に戻っていました（〔〕内同上）。

このように「引揚者」という語は，それが植民地出身者全般を対象にしている包括的な性格

をもち、アルジェリアの特別な性格を曖昧にし、従ってその地に対する元住民の心情を無視する呼称であるという点において、「引揚る」という行為を明確に示しアルジェリアの過去を共有する住民全てを含まないという限定的な性格を持つ点において、アルジェリア出身の仏市民の特有の過去を表さないという理由で拒否の対象であるのだといえる。

「引揚者」というカテゴリーの創造が、過去の故意の「忘却」によるものだとすれば、「ピエ・ノワール」という語は、過去への「誤解」を示している。ヴェルデ＝ルルーも、アルジェリアの仏市民のネガティブなイメージは、アルジェリアの仏市民の現実ではなく、なにより仏本国の歴史そのものに根をもつものである、と述べているが [Verdès-Leroux 2001: 27]、それは、彼らに関する「無知と無理解」を表すイメージを持つ語であると言うこともできる。そしてだからこそ、「ピエ・ノワール」をあえて名乗ることは、「誤解を解いていく」、すなわちそのイメージを変えていく、という意味で「挑戦」なのである。

「ピエ・ノワール」という語についていくつかの辞書にあたると、それはもともと、仏統治下初期のアルジェリアと仏本国とを行き来する石炭船の現地人運転水夫を指していたようである。なぜそれがアルジェリアの仏市民たちを指すようになったのかということについては、様々な説がある。よく言われるものに、植民地化の初期に北アフリカに渡った軍人の靴の色の象徴だというもの、北アフリカに移住した人々が葡萄を足で踏む伝統的ワイン製造を行いその製造過程で染まった足を象徴するというもの、また、アルジェの下町バベルウェド (Bab-el-Oued) の主婦たちを象徴するペニョワール (les peignoirs - バスローブ) のもじりという説、マラリアを避けるために植民者たちが足に塗っていた黒い薬の色という説、白人だがアフリカ大陸に定住したため足が黒くなったからという説などがあり、調査を行う中で、筆者は「モロッコのフランス人の若者たちが自らの徒党の名として用いていたものである、1950年代当時流行していたアメリカ合衆国のウェスタン映画に登場するネイティブ・アメリカンの一部族の名「Blackfeet」を、アルジェリア戦争中に仏本国のメディアが取り上げた」という説明も耳にした。様々な説がある中、一致して了解されたものはなく、ミステリアスな言葉とされているのが現状であるが、それら説明の多くにおいてその語は、仏領アルジェリア出身の仏市民の特徴や過去に関連付けられてはいる。言い換えれば、この語はアルジェリアの仏市民の特有の過去を象徴するものでありえると同時に、語源がミステリアスであり従って決定的な意味を有しないことが、その語を用いつつ意味合いを変えるという戦略を可能にしていると考えられるのである。

### III ピエ・ノワール諸組織とそれが目指すもの

#### 1 「ピエ・ノワール・コミュニティ」

筆者は、以前調査中に、「セルクル・アルジェリアニスト」のメンバーの1人に、「ピエ・ノワール」ではなく、「ピエ・ノワール・コミュニティ Communauté Pied-Noir」という言い方をすべきだと、注意をうながされたことがある。確かに、「人がピエ・ノワールについて話すときには、ある1つのコミュニティをイメージする」<sup>17)</sup> のであるが、なぜ、そういえるのであろうか。

「ピエ・ノワール」という呼称が仏領アルジェリア出身の仏市民たちに対して付与され、「誤解された過去」に基づく否定的なイメージを喚起する語であること、そしてそのようなイメージに対する挑戦として、アルジェリア出身の仏市民たちの中に、この語をあえて用いて「記憶」を語ろうとする動きがあること、さらにその前提として彼らのデラシネ意識があることについて述べてきたが、「ピエ・ノワール」という名乗りのもとに語られる「記憶」とは、集合的なもの、つまり「ピエ・ノワール」というコミュニティの存在を前提としている。

しかし、この「名」をある既存のコミュニティを表す単なる呼称であると捉えてよいだろうか。ある婦人は、「私もピエ・ノワールの1人」としながらも、筆者の調査対象である組織に話が及ぶと「彼らは非常にノスタルジック。だからあなたは気をつけなければ。色々な人がいるのだから」（強調は筆者）と言う。また、コンスタンチヌ出身の作家、ジャン＝リュック・アルーシュは、証言集のなかで、次のように記している。

私はピエ・ノワールではないし、自分がピエ・ノワールだと感じない。メルゲスも、Tchatche も、パタウェットも、〈我々のアラブ人たち〉に対する温情主義も、盲目的なホラも、〈プチ・ブラン〉のノスタルジアも好きではない（中略）その上私はもはや、太陽さえ好きではないのだ。[Stora et Ayoun 1989: 45]<sup>18)</sup>

「ピエ・ノワール」という名乗りは、アルジェリア出身の仏市民が、仏社会でマイノリティ

17) [www.casediscute.com/2000/38\\_pieds\\_noirs/dossier/dossier\\_03.shtml](http://www.casediscute.com/2000/38_pieds_noirs/dossier/dossier_03.shtml) «Quand on parle de Pieds-noirs, on imagine une communauté.»

18) メルゲスは羊肉の香辛料入りソーセージ。トルコやアラブ諸国の料理の1つだが、ピエ・ノワールの食文化の1つとされる。「おしゃべり」「多弁」の意の Tchatche は「ピエ・ノワール」語の1つとして最も知られたものの1つ。プチ・ブランとは、農業従事者で裕福だとされた少数の「コロン colon」に対し、大多数であった都市在住の労働者や小役人、小商店主などの、白人「庶民」を指す。太陽 (soleil) は、例えば、アルジェリア出身のアルベール・カミュ著『異邦人』においても、登場するが、「ピエ・ノワール」たちの間で、または彼らによって「アルジェリア」の1つの象徴として言及されるものであり、特にそれへの愛着という形で語られる。

とされたことに対する反応として、その枠組みを用いて「逆マイノリティ化」しようとする動きであると論じてきた。しかし、同じアルジェリア出身の仏市民の中には、「ピエ・ノワール」という名やまたその名のもとに表明される「共通の記憶」に自己同一化することを拒む人も存在し、また人によっては、例えば周囲からその語で認識されているというレベルにおいて、自らを「私はピエ・ノワールである」と語ることはあっても、それがすなわち「コミュニティ」の1員として自らを意識していることにはならない。

内堀は、「名」というものは、「名づけ」に留まる限りでは物質代替性を持たず、名乗りの行為があつて初めてある境界を持った集団としての装いを受けること、そして名乗りの行為とは、それが同じ名乗りをする者に向けて自己同一を繰返して確認するものであり、たとえ一個体がこれを行うにせよ、その背後に常にそれに呼応する共同の集合が意識されていることを指摘した [内堀 1989: 35]。これに依拠すれば、ある個人が自分を「ピエ・ノワールである」と語る時、または、「ピエ・ノワールとして」何かを語る時には、常に他者に対して自己規定が行われていると同時に、そこには、同じ境遇の「仲間たち」が「想定されている」のだということが出来る。さらに言えば、それは「想定されている」に過ぎない。つまり、自らを「ピエ・ノワールである」と言う行為の背景には、フランスの公的な歴史の中で否定的に語られる、または正しく語られない過去を自分と共有する「集団」の存在が「想定」されており、名乗りの行為は外部に対して自己を規定する発信であると同時に、他の「仲間たち」に対しての発信でもあるということである。そして、そのような発信をする時のコミュニティの「想定」においてのみ、「ピエ・ノワールという集団」を語る事が出来るといえよう。つまり「ピエ・ノワール」が「集団」であり、従つて本当の意味でマイノリティであるのは、積極的にマイノリティとなろうとするまさにその行為によるものだといえるのである。

## 2 ピエ・ノワール諸組織とその目的

上記のように考えるとすれば、仏社会において「ピエ・ノワール」というコミュニティの存在が想定されるのは、その名乗りに基づく継続的な「発信」があるからだといえる。集会の組織や刊行物などを通してパブリックな活動を行うピエ・ノワール諸組織の存在は、その担い手とも言えるのであり、従つてそれら組織の活動と方針は「ピエ・ノワール・コミュニティ」の在り方を定義する際に重要である。

仏本国に到着したアルジェリアの仏市民たちは、住居や再就職、年金の受取など再定住にあたつての補償問題に取り組むことになったが、幾つかの代表的な組織が政府との交渉の窓口になった。補償・賠償や、再定住のための負債解消などへの働きかけなど、再定住にあたつての物理的な問題の解消をその活動の主目的としたこれらはピエ・ノワール組織の「第一世代」である。これらの組織の特徴は、それゆえ組合理的な性格をもち、また海外領からの「引揚者」全

般を対象としたものも多かった。その活動は、物理的な問題が一旦解決し、各人が仕事や住居など生活の安定を取り戻し本国各地に離散していったことで下火となるが、その後新たに「第二世代」組織が結成されていく<sup>19)</sup>。

第二世代組織の特徴は、各地に離散した人々が再び集まることのできるような場を提供し、物理的な土地を失った「フランスのアルジェリア」の歴史と文化が失われないための活動を行うこと、そして若い世代の先導によって結成され、また仏領アルジェリアを経験していない人々も携わっていることにある。このような第二世代組織には、地域別の友好会や同好会的なものが非常に多く含まれるが、それらは主に、普段は離れて生活する「ピエ・ノワール」たちの交流の場としての役割を果たす、比較的私的な性格を持っているといえよう。しかし第二世代組織の中心的な存在は、第一世代組織の時代における政府の補償、特にアルジェリアの独立によってアルジェリア出身の仏市民の受けた精神的なダメージへのそれが十分でないとし、仏政府に政治的な働きかけを行う、より公的な性格を持つ諸組織である。そしてこれらの組織の存在は、「忘却」から「記憶の義務」そして「肯定」というフランスのアルジェリアの過去への解釈の変化に強い影響を与えてきた点で重要である。

フランスが、植民地やアルジェリア戦争の過去に対し忘却政策をとってきたことには、既に触れた。しかし、1999年に「アルジェリア戦争」という名称を正式に定めたことに始まった「記憶の義務」への動きは、その後、戦争中に犠牲になった現地仏市民や現地人補充兵の認知へと向かい、さらに2005年に成立した「フランス人引揚者のための、国の承認と国家的貢献に関する法」においては海外仏領におけるフランスの功績の認知へと向かった。このような変化の背景には、例えば、エヴィアン協定が締結された3月19日がアルジェリア戦争終結の記念日に制定されていることに対して、その日付は、まさに虐殺や誘拐などが始まった日、つまり休戦日どころではなく苦しみの始まりの日だとして抗議行動をとってきた「引揚者」組織の存在がある。これら組織はまた、アルジェリアの仏市民の世界大戦時におけるフランスへの貢献、そして植民地の過去におけるフランスの功績を歴史に残すことをその主張として掲げてきた。このような動きは、政府の忘却政策によって仏社会から完全に隔離され忘れられていった「アルキ」（註16参照）の第二世代が、仏政府に対して異議申し立てをした時期と重なり、フランス政府が「忘却」から「感謝・肯定」へと動き出す要因となった<sup>20)</sup>。

2005年法は、特に物質的な補償に関しては「アルキ」を主に対象としたものであるが、公

---

19) ピエ・ノワール諸組織に関する記述は、調査において得られた知見に加え、カルマン [Calmain 1994] を主に参考とした。特に「第一世代」「第二世代」という区分の使用はカルマン [Calmain 1994] に従っている。

20) フランスにおける、アルジェリアの過去に対する、忘却から「記憶の義務」そして感謝・肯定へという動きに関しては高山 [2006] に詳しい。

教育において植民地でのフランスの肯定的な役割への言及を義務付ける条項が盛り込まれた。この第4条はその後仏社会において大議論を巻き起こし、歴史家や知識人の猛反対を受けて最終的に取り下げられたが、それが一旦成立したことに見られる、アルジェリアの過去に対するフランスの対応が「忘却」から「肯定」へと変化していったことの意味は大きい。そしてそのような動きを導いたという意味で、仏社会において「ピエ・ノワール」として積極的に「マイノリティ」となったアルジェリア出身の仏市民の働きかけは、一見マジョリティ社会との差異を表すものであり、「マジョリティ」に対して自己規定するものである。しかし同時にそれは、マジョリティ社会の歴史認識を変えて過去を取り戻し、最終的にマジョリティ社会との一体化を目指すものであるといえるだろう。この意味で、これらの動きは極めて政治的なものである。

### 結びにかえて——「セルクル・アルジェリアニスト」とその活動の意義

1973年に発足し、40の支部と約1000人の活動会員と約1万人の機関誌購読者を持ち<sup>21)</sup>「第二世代」組織の中でその規模や活動の活発さという点で最大である「セルクル・アルジェリアニスト」も無論、上記の例に漏れない。2005年法、そしてその第4条の回復は組織の目下の関心事であり、それらへの政治的な組織上層部による働きかけは、先の大統領選でも顕著であった<sup>22)</sup>。しかし、「セルクル・アルジェリアニスト」の最大の特徴はそれが「文化組織」であるという点である。結びにかえて、「ピエ・ノワール」組織を代表するこの組織が「文化組織」であるということの意味について考えてみたい。

このセルクルの設立目的は、「地理的には失われたが、100万の人々の魂と、アルジェリアの地における様々な文明の交差点で生れた独創的な文化、歴史、形成されつつあった言語の中に存在するフランスの一地方を生きし続けること」であり、特に若い世代の取り込みや研究の促進にも力を入れている。その活動には、文芸機関誌『ラルジェリアニスト (*l'algerianiste*)』の発行、博物館“Musée d'Algérie française”の運営・管理、映画祭“Festival International du Film Algérieniste”開催、劇団“Théâtre Pied-Noir”の運営・公演、そして、仏領アルジェリアについて書かれた書に授与される文学賞“Prix Littéraire Algérieniste Jean Pomier”仏領アルジェリアあるいは「ピエ・ノワール」について書かれた博士論文に授与される“Prix Universitaire Algérieniste”の授与などが含まれる。

このような「セルクル・アルジェリアニスト」の活動は、それがその組織名に明確に提示されているように、1920年代にアルジェリアで提唱された「アルジェリニズム」の継承である。

21) 2004年現在。

22) 2007年の仏大統領選に先立ち、「セルクル・アルジェリアニスト」を含むピエ・ノワール・引揚者諸組織は、各党の立候補者に質問表を送るなどし、積極的な働きかけを行なっている。

「アルジェリアニズム」とは仏領アルジェリアで生れた「新しい人々」とその日常を「文化」とし、文芸に表していこうとするものであったことについては既に触れた。

「セルクル・アルジェリアニスト」の活動は、アルジェリア戦争やエグゾードあるいは植民地主義といった観点からのみ議論されがちな「フランスのアルジェリア」の日常と「文化」の記憶を表明するものである。その意味でそれは単なる「ノスタルジア」だとしばしば嘲笑に伏されるのであるが、しかし「文化組織」といえどもやはり歴史に異を唱える政治性がその目的に潜んでいることは否めない。フランスの歴史には刻まれない仏領アルジェリアにおける「文化」の表明と継承を目的とした活動は、公的な歴史に対する「記憶」の表明、歴史への異議申し立てであり、その意味でやはり、過去を共有するという意味でのマジョリティ社会との同化を最終的に目指すものだといえるだろう。

しかし、このピエ・ノワール組織が「文化的である」ということは、それが単に過去の継承に努めているということに留まらない。仏領アルジェリアという土地が失われた現在、この組織が活動を続けていくということにおいて、つまりその存続のうちに、仏領アルジェリアの「過去」が現在に続いているものとして、また、それを現在に根づかせ未来に継承していくという意味において、かつてのアルジェリアニズムが「アルジェリアン」というアイデンティティを意識化したように、「デラシネ」のピエ・ノワールたちにある種の帰属意識の行き着くところを提供しているともまた考えられる。この組織が多くのピエ・ノワールたちの支持を集め、活発に活動を続けていることに、そのような切実な理由もあると考えれば、最終的にマジョリティ社会と過去を共有するという「ピエ・ノワール」の目的は、同時に、アイデンティティが行き着く場の創造への手段でもあるのではないだろうか。

いずれにせよ、「ピエ・ノワール」の存在が提起する問題は、フランスに、植民地の過去とどう向き合うのかという大きな課題を突きつけるものであり、今後も簡単に解決が見込まれる問題ではなく、そしてその時々々の政治的・国際的文脈に左右されえる問題である。こういった状況において、今後「セルクル・アルジェリアニスト」のような組織がどのような道をたどるのかということは注目に値するだろう。

## 参 考 文 献

Ageron, Charles-Robert(Documents choisis et présentés par)

1973 *L'anticolonialisme en France de 1871-1914*, Paris: Presses Universitaires de France.

Baroli, Marc

1967 *La Vie Quotidienne des Français en Algérie 1830-1914*, Paris: Hachette.

- Baussant, Michèle  
2002 *Pieds-Noirs Mémoires d'Exils*, Paris: Stock.
- Benamou, Georges-Marc  
2003 *Un Mensonge Français Retours sur la Guerre d'Algérie*, Paris: Robert Laffont.
- Calmein, Maurice  
1994 *Les Associations Pieds-Noirs 1962-1994*, Carcassonne: SOS Outre-Mer.
- Calmein, Maurice and Christiane Lacoste-Adrover  
2002 *Dis, C'était Comment, L'Algérie Française? 20 Questions et Réponses à l'Intention des Jeunes Pieds-Noirs*, Friedberg Atlantis.
- Delpard, Raphaël  
2002 *L'Histoire des Pieds-Noirs d'Algérie 1830-1962*, Neuilly-sur-Seine: Michel Lafon.  
2003 *Les Oubliés de la Guerre d'Algérie*, Neuilly-sur-Seine: Michel Lafon.
- Hureau, Joëlle  
1987 *La Mémoire des Pieds-noirs*, Paris: Oliver Orban.
- Jordi, Jean Jacques  
1993 *De L'Exode à L'Exil*, Paris: L'Harmattan.  
1995 *1962: L'Arrivée des Pieds-Noirs*, Paris: Autrement.  
2002 *Les Pieds-noirs: Constructions Identitaires et Réinvention des Origines*, <http://www.adri.fr/HM/articles/1236/1236.pdf>, Paris: Hommes & Migrations.
- Kateb, Kamel  
2001 *Européens, «Indigènes» et Juifs en Algérie (1830-1962) Représentations et Réalités des Populations*, Paris: INED.
- Pervillé, Guy  
2003 *Atlas de la Guerre d'Algérie De la Conquête à l'Indépendance*, Paris: Autrement.
- Robles, Emmanuel (présentés par)  
1982 *Les Pieds-Noirs*, Paris: Philippe Lebaud.
- San Juan, Marie-Claude  
2004 *Pieds-Noirs, Identité et Culture*, Mouans-Sartoux: PEMF.
- Savarese, Éric  
2002 *L'invention des Pieds-Noirs*, Paris: Séguier.  
2007 *Algérie la Guerre des Mémoires*, Paris: Non lieu.
- Stora, Benjamin  
2001 *Algeria 1830-2000: A Short History*, (translated by Todd, Jane Marie), Ithaca: Cornell University Press.
- Stora, Jean-Pierre, Ayoun, Monique  
1989 *Mon Algérie, 62 Personnalités Témoignent*, Paris: Acropole.
- Tillion, Germaine  
1958 *Algeria, the Realities* (translated by Matthews Ronald), London: Ronald Eyre & Spottiswoode.

Verdès-Leroux, Jeannine

2001 *Les Français d'Algérie de 1830 à aujourd'hui Une page d'histoire déchirée*, Paris: Fayard.

アジュロン, シャルル＝ロベール

2002 『アルジェリア近現代史』(私市正年・中島節子訳), 東京: 白水社.

足立 綾

2005 修士論文「「アルジェリアニスト」の活動にみる「ピエノワールの記憶」, 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻.

サルトル, ジャン＝ポール

2002 『植民地の問題』(多田道太郎他訳), 京都: 人文書院.

内堀基光

1989 「民族論メモランダム」『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス—』田辺繁治(編), 27-43 ページ, 東京: 同文館.

高山直也

2006 「フランスの植民地支配を肯定する法律とその第4条第2項の廃止について」『外国の立法』226: 92-113, 東京: 国立国会図書館調査立法考査局.

平野千果子

2002 『フランス植民地主義の歴史—奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』京都: 人文書院.

ホーン, アリステア

1994 『サハラの砂, オーレスの石 アルジェリア独立革命史』(北村美都穂訳), 東京: 第三書館.

ミュレール, ジャン他

1958 『太陽の影 アルジェリア出征兵士の手記』(鈴木道彦・二宮敬・小林善彦訳), 東京: 青木書店.

ヤコノ, グザヴィエ

1998 『フランス植民地帝国の歴史』(平野千果子訳), 東京: 白水社.